

〔文学篇〕

【論文】

スペクタクル化される狂気

—『リア王』における「ベドラム乞食」の表象

松 岡 浩 史

The Spectacularity of Madness – The Representation of “Bedlam Beggars” in *King Lear*

Hiroshi MATSUOKA

要旨 (Abstract)

St. Bethlem Hospital in Shakespeare's age was merely a small asylum housing fewer than thirty inmates during the late sixteenth and early seventeenth centuries. Without any actual counterpart in the real world, the discourse that it functioned as an entertainment center fascinated the playwrights of the age and even the modern critics. While the vagabond in early modern England were branded as nuisance of the age due to a set of Vagrancy Acts, their literary characters were creating the image of rogues of the 'Elizabethan Underworld'. Edgar in *King Lear*, following this tradition, both entertains and touches a pitiful cord in the audience with his 'spectacular' performance as a demoniac, whose bizarre posture also worked as fictional spectacle to Shakespeare's audience, for exorcism in the protestant England was prohibited by the Elizabethan and Jacobean authority. This paper points out the possibility that Shakespeare pre-engaged the representation of lunatics as a spectacle show, which became common entertainment from the late seventeenth century on.

キーワード (Keywords) : 狂気、エクソシズム、演劇表象、娯楽産業、見世物文化、文化的他者

このペーパーでは「ベドラムのトム」というシェイクスピア時代の浮浪乞食及び彼らを収容した慈善施設の固定像に着目し、そのフィクション性を分析することで『リア王』執筆時における「狂人見物という娯楽コード」の存在の有無を検証したい。果たして狂人を見ることは、シェイクスピア時代において、どのような娯楽でありえたのか。シェイクスピア劇からの引用はすべてRSC全集版による。

1. 聖ベツレヘム慈善院の変遷—初期ベドラムに関する言説とそのフィクション性

聖ベツレヘム慈善院（通称ベドラム）は、1247年に貧民救済を目的としてビショップスゲイト・ストリートに設立された修道院付属の慈善施設であったが、宗教改革後には精神病患者のための小規模な病院施設となり、17世紀末には大規模な精神病院へと発展する (Allderidge, x-xi)。こんにちのベドラムのステレオタイプを形成したのは、いうまでもなくロココ時代のイングランドの画家ウィリアム・

ホガースによる8点の油彩画、『放蕩一代記』(*A Rake's Progress*, 1735)であるが、ここに描かれたベドラム慈善院は、ロンドン大火後間もない1676年に建築家ロバート・フックによってムーアフィールズに再建設されたものであり、いわゆる見世物小屋としての固定化されたベドラムのイメージがこの再建後の施設に依拠するものであるということは、本稿において押さえておくべき前提となる。例えば、1ペニーを支払って入場した見物客が、患者を突いて興奮させるためにステッキを持ち込むことを許されていたことであるとか、年間見物客動員数が96,000人であった(Reed 23-6)ことなど、娯楽施設として定着したベドラムのイメージは、いずれもシェイクスピア時代のベドラムとは関係がない。

ビショップスゲイトのベドラム慈善院について我々が知りうることは、この施設が精神病患者を収容した慈善のための病院施設であったことや、汚水処理などの点で劣悪な環境であったという程度のこと過ぎず(Allderidge, 153; Neely, 202)、後述する「見世物小屋」仮説は、見物の興行形態や料金体系などを含め、一切の重要なエビデンスを提示していない。

いっぽうで、一連のジェイムズ朝演劇作品においては、あたかもベドラム見物の慣習、すなわち娯楽の対象として狂人を見る慣習があったかのような描写が散見される。トマス・デッカーは『貞淑な娼婦 第一部』(*The Honest Whore, Part One*, 1605)で精神病院の場면을初めて演劇化し、ジョン・ウェブスターとデッカーによる『北行きだよ!』(*Northward Ho*, 1607)、ウェブスターの『モルフィ侯爵夫人』(*The Duchess of Mafli*, 1612/14)、ジョン・フレッチャーの『巡礼者』(*The Pilgrim*, 1622)、トマス・ミドルトンとウィリアム・ローリーの共作である『チェンジリング』(*The Changeling*, 1622)、そしてジョン・フォードの『恋人の憂鬱』(*The Lover's Melancholy*, 1628)も同様にベドラムを演劇化した作品である。とりわけ『貞淑な娼婦』のテキストは、ベドラムの内部を具体的に描写しているという点において注目に値する。

掃除夫　ええ、その通りで。私は下働きの一人です。狂人どもの部屋を掃いたり、藁を持ってきてやったり、奴らを縛る鎖や、叩く棒を買いに行ったりしてます。私も昔は患者だったんだ。でもアンセルム神父には感謝してますよ。鞭を食らわせて正気に戻してくださったんですから。

(*The Honest Whore, Part I*, 5.2.108-12)

ここでは、精神病治療のための拘束具や監禁場所に藁を敷き詰める様子など、虐待的な治療の手法が描写されている。さらに、娯楽施設としてのベドラムに関して重要な資料を提供しているのが、ベン・ジョンソンの『エピシーン、あるいは寡黙な女』(*Epicoeone, or The Silent Woman*, 1609)における4幕3場の場面である。

ホーティ　では私たちと一緒にベドラムにでも繰り出しましょう (go with us to Bedlam)。
チャイナ・ハウスや、王立株式取引所にも。
セントー　そうすればあなたの名声の扉が開かれるでしょう。

(*Epicoeone, or The Silent Woman*, 4.3.19-20)

このように、ベドラム見物は夫人の嗜みの一つとして描かれており、フィクションの領域ではベドラムが娯楽の対象であったことを示している。そしてこのような演劇作品における言及を受けて、第一期ベドラム、すなわちシェイクスピア時代のピショップスゲイトのベドラムが見世物小屋であったという言説が生まれることになる。

例えば、17世紀初頭から19世紀の見世物娯楽文化を記述しているリチャード・オルティックの『ロンドンの見世物』(*Shows of London*, 1978)では、このジョンソンのテキストをシェイクスピア時代のベドラムが娯楽施設化されていたことの証左としている。

ベドラムと一般に呼ばれたピショップスゲイトにある精神病院は、ベン・ジョンソンの『エピソード、または寡黙な女』に登場しているように、早くも1609年には総合演芸場 (an entertainment center) になっていた。同じ年、典型的な上流のホーム・パーティ、すなわちパーシー卿のホーム・パーティでは、10シリングを払って、ベドラムの21室の患者たちがリハーサルなしの狂言を演じるのを見た。

(Altick, 44)

オルティックの言及は、ジョンソンや他の劇作家によるベドラム表象に基づいて、現代の研究者までもがベドラムを娯楽施設の一つとして論じてきた可能性を示唆する。同様に、マイケル・マクドナルドは1981年の著作『神秘的ベドラム』(*Mystical Bedlam*)において、ベドラムを狂人の娯楽性という側面からとらえている。

ルネサンス期のイングランド人は道化と狂人に魅了されていた。ジェイムズ朝の舞台は阿呆と狂人に溢れており、人気作家やバラッド制作者はみずからの作品に自然の道化、偽の狂人、気違いトム、メランコリーの紳士、そして正気を失った恋人たちを登場させた。…イングランド演劇の偉大な時代において、もっともロンドンで最も長期間興行されたショーはベドラムそれ自体であった (the longest running show in London was Bedlam itself)。16世紀末から17世紀初頭において、狭くてむさ苦しいその精神病院が収容できたのは、30人未満の患者に過ぎなかった。

(MacDonald, 121)

マクドナルドは、道化 (fool) と狂人 (lunatic) を、ルネサンス演劇を特徴づけるストック・キャラクターとして位置づけたうえで、現実社会におけるベドラム慈善院を劇場興行にたとえる。さらに、ダンカン・サルケルドは『シェイクスピア時代の狂気と演劇』(*Madness and Drama in the Age of Shakespeare*, 1993)において、ベドラムの潜在的なスペクタクル性を指摘する。

ベドラムの場面は、おそらくは狂気のスペクタクル性 (spectacularity) と、奇異性を含む唯一の場所を生き生きと描くことで、ルネサンス劇において流行した。一種の劇場空間そのものとして、つまり心の中の悲喜劇が痛々しく示される場所として、ベドラムはスペクタクルのための素材の供給源を劇作家に与えた。

(Salkeld, 123)

サルケルドに従うならば、現実のベドラムのスペクタクル性が言わば先行し、影響を受けた劇作家が後追いでベドラムを演劇化したことになる。ウィリアム・C・キャロルはまた、『肥った王、やせた乞食』(*Fat King, Lean Beggar: Representations of Poverty in the Age of Shakespeare*, 1996)において、ベドラムの娯楽性を次のように論じている。

ベドラム貧民はこのように人気を呼ぶ娯楽の別の形式 (another form of popular entertainment) にすぎなかった。都市部に暮らす人々の好奇心を満たし、その演劇的なスペクタクル性 (theatricalized spectacles) は熊いじめや演劇に相当するものであった。

(Carroll, 100)

キャロルは「ベドラム貧民」を娯楽のモードの一つとみなし、とりわけそのスペクタクル性に注目し、熊いじめや観劇同様に、「見る」娯楽の延長線上に位置付けている。ことほど左様に、ベドラムのもつスペクタクル的要素は、同時代の劇作家のみならず現代の研究者をも魅了し、想像力を掻き立てる源泉となっていることがわかる。

しかしながら、ベドラム慈善院がシェイクスピア時代において見世物小屋として機能していたという通説は、実は極めて脆弱なエビデンスに依拠しており、近年ではジョナサン・アンドルーズ (1997) やキャロル・トマス・ニーリー (2004)、ケン・ジャクソン (2005) らの研究によって疑問視され、実態は小規模な慈善施設に過ぎなかったことが指摘されている。

たしかに、1598年に出版されたジョン・ストウの『ロンドン地誌』(*Survey of London*) は、ベドラム慈善院に関してはその設立と立地に関する情報に終始しており、そこに娯楽に関する要素は一切見いだせない。

聖ボトルフ教会区に隣接して、旅行客を受け入れる宿屋がある。そして、ロンドンの刑執行官の一人サイモン・フィッツメアリーによって1246年に設立された、ベツレム聖メアリー教会の病院がある。聖職者と修道女のいる小修道院であったが、エドワード3世に保護を与えられ、統治時代の14年目に私はロンドンで見学した。

(Stow, 154)

どれほど前に誰によって建てられたのか私にはわからないが、ロンドンには弾圧を免れた一軒の施設があり、そこにしばらくの間、気の狂った人たちが収容された。宮殿のすぐ近くにそのような種類の収容所があることを不快に思う英国王¹は、遠くロンドンのビショップスゲイトの外側のベツレヘムへ、つまり例の聖メアリー病院へ被収容者を移させたと言えられているが、前述のチャリング・クロスの施設は今も残っている。

(Stow, 375)

ロンドンの地理、風俗、慣習を網羅的に記述したストウの著作が、このようにベドラム慈善院につい

て単なる狂人の収容施設としてしか言及していないことは、少なくとも16世紀末に見世物小屋興業が産業化していなかったことを示唆している。

ただし、ピショップスゲイトのベドラムの見学記録が皆無なわけではない。パトリア・オルダリッジによれば、1632年の記録に「ベドラムを見に来た人々によって病院玄関で支払われた金 (money given at the hospital door by persons that come to see the house)」についての言及がある (Allderidge 21; Neely 201, n.28) が、その訪問の目的は記されておらず、見世物興行の存在を示すエビデンスとみなすことには無理がある。

さらに、娯楽施設としてのベドラムに関して、唯一無二の根拠となるデータを提供しているのが、先に引用したオルティックの言及にもみられるパーシー卿のホーム・パーティのエピソード、すなわち王立委員会編の歴史文書が示す1609年の資料である。

1609, Feb. 6 – 1610, Feb.6 Expenses of housekeeping at the Tower, and board of servants at the Tower and at Syon. – Rewards: To Francesco Petrozani, for reading Italian to the Earl, 7£. – To Dr Turner, 40s. – to Mr. Fenton, the chirurgeon, 10s. – In reward by Lord Percy, viz., for seeing the Lions, with Lady Penelope and his 2 sisters, 6s.; the show of Bethlehem, 10s.; the place where the Prince^a was created, 2s.; and the fireworks at the Artillery gardens, 10s.

Sixth Report of the Royal Commissioners on Historical Manuscripts: Part I Report and Appendix, 1877. (下線は執筆者による)

この資料は、ノーサンバランド伯爵であるヘンリー・パーシーの3人の親戚の子供たちが、ロンドン塔に暮らしている伯父を訪ね、そこでライオン見物をした後、ロンドンの娯楽を楽しんだ、という微笑ましい観光記録である。ここでは確かに、ライオン見物と同列に、10シリングを支払ってベドラム見学に行ったとする事例が示されているため、ベドラム見世物小屋説をサポートする「エビデンス」を提供しているように見える。しかし、この資料もまた、ニーリーも指摘するように、ピショップスゲイトのベドラムが見世物小屋化していたことを直接的に裏付けるデータではない (Neely, 200-3) ため、結局のところ、シェイクスピア時代におけるベドラムという「娯楽施設」の存在の有無に関しては決定的なエビデンスは存在しない、というのが資料面における現状ということになる。

ベドラム慈善院の歴史を包括的に論じたジョナサン・アンドルーズの『ベスレムの歴史』(*The History of Bethlem*, 1997) に詳細に記されている見物客の訪問記録に関しても、1723年以降のムーアフィールドズの第二期ベドラムについてのデータしか参照できない。これは、オルダリッジ作成の年表 (Appendix 1) からわかるように、入場者の登録が始まったのがムーアフィールドズに移転後の1683年以降であるためだが、このエビデンスの不在こそが、ピショップスゲイトのベドラムに対して想像力を働かせる余地を生んでいることは疑いを入れない。

では、見世物小屋興業がこの時期に存在しなかったとすれば、対応する社会的現実が存在しないにもかかわらず、ベドラム見学に関する言説のみが初期近代から20世紀にいたるまで蔓延しているのはなぜなのか。言い換えれば、シェイクスピアの『リア王』に描かれるベドラムのイメージはどこがどうフィクションなのか。エドガーが演じるベドラムのトムは、シェイクスピア時代においてすでに見物や娯楽の対象であったのか、それとも憐憫や嫌悪の対象であったのか。この点を議論するために、

シェイクスピア時代の浮浪者文学の系譜を概観し、エドガーの演技の特異性を明らかにしたい。

2. 浮浪者文学の系譜におけるエドガーの特異性

アレキサンダー・バークレイによるセバスチャン・ブランの『阿呆船』(*Das Narrenschiff*, 1494/1497)の英訳版(*The Ship of Fools*, 1508)を源流とする浮浪者文学・悪漢文学の作家たちは、浮浪者の「裏社会」にリアリティをもたせるため、物語をドキュメンタリクな筆致をもって描いている。1561年に出版されたジョン・オードレイの『浮浪者の同胞団』(*The Fraternity of Vagabonds*)は、3種類の「いかさま師と詐欺師」、それに25の「悪漢の序列」に加えて、19種類の浮浪者をカタログ化しているパンフレットであるが、そこでは浮浪する狂人は、「アブラム・マン (An Abram-man)ⁱⁱⁱ」あるいは「トム・オベドラム (Tom O'Bedlam)」というあだ名で呼ばれている。

アブラム・マンは、腕をむき出して、裸足で歩き、狂人のふりをして、羊毛のリュックやベーコンを串刺しにした杖など、その種のがらくたを持ち歩き、自分のことを憐れなトムと呼ぶ。
(Awdeley, 91)

また、ケント州のジェントルマン階級出身のトマス・ハーマンによって書かれた『浮浪者と呼ばれる者への警告』(*A Caveat or Warening for Commen Cursetors Vulgarely Called Vagabones*, 1566)は、一人称語りによって浮浪乞食 (vagrant beggar) の詐欺を暴露するパンフレットであるが、そこでは200人もの悪名高い浮浪者の名前が列記され、施しの受け方に関する詐欺の手口が紹介される。ハーマンによるアブラム・マンの定義はベドラム慈善院にも言及している。

アブラム・マンは、気が狂って、そのためにベドラム慈善院もしくは他の監獄に長期間収容されていたと偽る者である。実際には20人に1人も、そのような理由で投獄された者はいない。しかし、この輩は憐れみを誘うように自分が監獄で過激な虐待を受けていたことを語りだす。
(Harman, 127)

オードレイやハーマンが描く「裏社会」は、現実社会において急増する浮浪者の脅威を背景に、貧民と狂人というマージナルな社会集団を作品の訴求力としたフィクションであるといえる。しかし、これら16世紀後半に執筆された浮浪者文学が描くフィクションの世界においては、狂人を見世物化し、見て楽しむというモードは確認されない。

『リア王』においてエドガーが演じる「気違い乞食」は、狂人のふりをする詐欺師であり、その視覚的な特徴において、浮浪者文学の系譜を踏まえているといえる。

この国にはその為の証拠と前例がある。
あのベドラムの気違い乞食だ。彼らは呻き声をあげ、
感覚を失った剥きだしの腕に、針、木串、釘、
ローズマリーの小枝などを突き刺し、

その見るも無惨な格好で、卑しい農家から
 貧しい小村、羊小屋、水車小屋を訪れ、
 とくどき狂気の呪いや祈りで施しを強要する。
 憐れなターリゴッドだよ！憐れなトムだよ！
 これならいける。エドガーじゃだめだ。

(*King Lear*, 2.3.13-21)

エドガーはこの場面で、「イングランドに蔓延するベドラム乞食」を演じるという決意表明を行うが、オードレイやハーマンの描くアブラム・マンとの類似性は言うまでもないだろう。むき出しの腕を傷だらけにして、虐待された様子を視覚的に再現して聞き手を恐怖に陥れた後で、自らを「憐れなトム」と呼び、憐憫を誘うのが彼の戦略であるらしい。

しかしながらキャロルは、シェイクスピア時代の観客にとって、ベドラムのトムのイメージは、憐憫ではなく嫌悪の対象であったと指摘する。というのも、オードレイが描くアブラム・マンが示す通り、シェイクスピア時代における「気違い乞食」は、詐欺師の代名詞であったからであり、エドガーが演じようとするのは、ベドラムの患者ではなく、ベドラムの患者を装う、浮浪者文学によってステレオタイプ化された詐欺師だからである。事実、4幕1場のエドガーによる「気違いトム」の演技によって、グロスターはまんまと財布を差し出してしまう。観客の間に共有された「ベドラム乞食」に関する共通イメージの存在は、エドガーの演技をフィクションとして消費する素地があったことを示している。

実際に、シェイクスピアの時代は1572年の救貧法改正によって、救貧税 (poor rates) の徴収が義務化され、救貧対策の経済負担が自発的な慈善から強制徴収へと方向転換し、浮浪者を単純に憐憫の対象として見るのが困難になった時代であった (Pound, 46)。したがって、『リア王』において、リアやグロスターを感じる憐憫を観客が共有することはないだろう。観客が憐れみを感じるとすれば、それはベドラム乞食そのものでなく、狂人を演じる乞食をさらに演じるエドガーの境遇、役回りである。言い換えれば、観客はエドガーの演技をメタ的に享受していたということになる。

実際に、2幕3場のエドガーは極めて演技に対して自意識的である。

顔には泥を塗りたくり、
 腰には布一枚、髪はくしゃくしゃに纏れさせ、
 素っ裸を晒して、
 風という空からの迫害に立ち向かおう。

(*King Lear*, 2.3.9-12)

エドガーの変装は、演劇のコンヴェンションに守られて観客以外の誰にも見破られないが、彼が上記の台詞を語る時、この楽屋で発せられたかの如き自意識な演技に関する含意は、この変装が演劇的なフィクションであることを観客に印象付ける。

このように、2幕3場のエドガーは、浮浪者文学の系譜に見られるアブラム・マンを演じることを決意するが、実際に彼がリアの前に登場する3幕4場、そしてグロスターと出会う4幕1場においては、かなり特殊な狂人を演じることになる。

憐れなトムは悪魔に正気を奪し取られたんだ。
 あんたは良い人だから、悪魔に取り憑かれませんかように。
 憐れなトムはいっぺんに五体の悪魔に取り憑かれたことがある。
 肉欲の悪魔オピディカットだろ、唾の悪魔ホバディダンス、
 泥棒の悪魔マヒューだろ、人殺しの悪魔モード、百面相の悪魔
 フリバティジベット。こいつはその後、侍女や小間使いに取り憑いてるよ。
 だから気をつけなよ、旦那。

(*King Lear*, 4.1.60-66)

エドガーの演技に特徴的な点は、言うまでもなく悪魔憑きのコノテーションである。エドガーは同時代のストック・イメージである「ベドラムのトム」を演じる、と宣言しながらも、実際にはエクソシズムの患者である悪魔憑きを演じるのだ。これは、オードレイやハーマンの浮浪乞食では描かれない特徴であり、シェイクスピアによるオリジナルの脚色である。浮浪者文学の系譜に詐欺師というステレオタイプを形成していた「ベドラムのトム」「アブラム・マン」に対して、エドガーは悪魔憑きのイメージをアップデートしようとする。ではなぜシェイクスピアは、エドガーに悪魔憑きの脚色を付加したのだろうか。

3. スペクタクルとしてのエクソシズム

シェイクスピアが『リア王』を執筆するさいに、ロンドン主教付きの聖職者、サミュエル・ハーズネットによる反エクソシズムパンフレット『言語道断のカトリックの欺瞞の告発』(*A Declaration of Egregious Popish Impostures*, 1603-5)を読んでいたであろうことは、ケネス・ミュアの指摘以来、長らく認められてきたことである (Greenblatt, 147)^v。

シェイクスピアはハーズネットから、「気違い乞食」に変装したエドガーに取り憑く悪魔の名前と、狂気に関するイディオムを借用したと言われているが、ステイーブン・グリーンブラットも指摘するように (150)、エクソシズムはカリスマ的施術者と観客によって構成される、極めてスペクタクル性の高いイベントであり、エクソシストと悪魔憑きによって演じられる悪魔祓いの「ショー」は、見物人を恐怖に陥れた上で、悪魔からの救済というカタルシスを生み出す装置でもあった。

仮にエクソシズムにおける悪魔憑きの存在がシェイクスピア時代においてありふれた社会的現実であったとするならば、エドガーの演技は観客の目に現実的な脅威に映ったかもしれない。しかし、シェイクスピア時代の現実のイングランドにおいては、英国国教会によってエクソシズムそのものが事実上禁止されていたため^v、国教会唯一のエクソシスト、ジョン・ダレルが1590年代に行った一連のエクソシズムは、インテリ層の間で議論の対象となった例外中の例外の事例にすぎず、シェイクスピアの観客が共有する社会的対応物があったわけではない。したがって、大陸で大々的に行われていたカトリック式のエクソシズムの存在は、狂気に陥ることに対する恐怖心を観客に植え付け、救済者たるエクソシストの存在が無効化された、救いのない世界をイングランド演劇に誕生させていたといえる。言い換えれば、エドガーの悪魔憑きの演技は『リア王』の観客にとっては現実へのアリュージョンで

もデフォルメでも皮肉でもなく、狂気の恐怖を生成する装置そのものであった。

シェイクスピア時代において狂気の原因にたいして想定された説明原理は、ガレノス四体液学説にもとづくメランコリーか、悪魔憑きのいずれかであったが、同時代の占星術師で医者でもあったリチャード・ネイピアの診断記録によると、精神の不調を訴える患者の内のおよそ7%が悪魔憑きの不安に駆られていたことがわかる。

Table 5.1. *Patients fearing demons or reportedly possessed (in percent)*

	All mentally disturbed (N=2,483)	Demoniacs (N=164)
Mad, lunatic, distracted	10.3	4.8
Light-headed	15.0	9.8
Melancholy	19.9	11.0
Troubled in mind	32.0	41.5
Suicidal	6.4	17.1
Tempted	5.3	18.1
Evil thoughts	3.6	8.5
Religious anxiety	11.8	28.0
Hallucinations	5.1	26.8
Mopish	15.2	11.6

Note: Figures are percentages of consultations in which these symptoms appear. Demons were mentioned in 148 cases.

(MacDonald, 200)

しかしながら、マクドナルドに従えば、「そのような人々のなかで、深刻な精神病を患っている者や、視覚的な (spectacular) 症状を示すものはほとんどいなかった」(MacDonald, 200-1) という。つまり、悪魔憑き自体は当時の観客にとって馴染みのある概念や現象であったとしても、エドガーが演じるような悪魔憑き、すなわちエクソシズムの患者が示すドラマティックな視覚的特徴は、同時代の演劇表象においては狂気のスペクタクル化に他ならなかったことになる。だとすれば、近年のベドラム研究が指摘するとおり、ビショップスゲイトの施設が見世物小屋ではなかったとしても、実は劇場の中ではすでに狂気の見世物化が起こっていた、ということができのかもしれない。

舞台のコンヴェンションを知る観客にとって、エドガーによる自意識的な悪魔憑きの演技は、フィクション以外の何物でもない。それ故に、この場面が憐憫の対象となり得るとすれば、それは観客がスペクタクル化された狂気を視覚的に楽しみながら、同時に舞台上に描かれているのが、実は親子関係の悲惨な断絶と再会の場面であることを知っているからに他ならない。

ケン・ジャクソンは『隔てられた劇場』(Separate Theaters, 2005) の中で、17世紀以降、娯楽産業化していくベドラムについて、狂人の見世物化は、人々の憐みと慈善を引き出すために行われたのであり、見世物化することと、慈善の対象であることは矛盾しない時代だった、と指摘する (12-15)。だとすれば、ムーアフィールドズのベドラム慈善院に「見物」に出かける人々は、狂人を見ることを楽しみ、同時に憐みから慈善の寄付を行ったことになる。ちょうどグロブ座における『リア王』の観客が、エドガーの狂気を楽しみ、同時に憐れむように。狂気を楽しみ、憐れむというモードは、実は『リア王』においてはエドガーの自覚的な演技の中に隠されているのかもしれない。

見世物小屋興業が行われていたと言説とは裏腹に、シェイクスピアの時代のベドラム慈善院は、

現実には収容人数30人未満の小規模な慈善施設であったが、そこに収容された患者は浮浪者文学のフィクションの世界では、「トム・オベドラム」、あるいは「アブラム・マン」というステレオタイプを形成していた。シェイクスピアはその固定像を、エドガーの悪魔憑きの演技によってスペクタクル化しようとする。

本稿の目的は、17世紀以降に娯楽産業化されていく狂気表象の先取りを演劇が担っていた可能性を指摘することである。シェイクスピア時代のピショップスゲイトのベドラムが見世物興行を行っていたかどうかについての決定的なエビデンスは存在しないが、シェイクスピアが『リア王』に描いたようなスペクタクルは、のちにベドラム見物のような形で確実に現実化していくことになる。

※本稿は第57回シェイクスピア学会（2018年10月14日）におけるセミナー（「シェイクスピア劇と同時代の娯楽・風俗文化」）の口頭発表に基づく。

Appendix

Chronology of St. Mary Bethlehem Hospital

- | | |
|---------|--|
| 1247 | 23 October. <u>The Priory of St Mary of Bethlehem, Bishopsgate, is founded by Simon Fitz Mary.</u> |
| 1329 | First known reference to the priory as a “hospice” or “hospital”. |
| 1346 | The master of Bethlem appeals to the City of London for protection and patronage. Bethlem’s links with the City are first established at this time. |
| 1403 | At an enquiry into malpractices at the hospital, it is recorded that there are six insane men in residence there. First reference to Bethlem’s use as a hospital for the insane. |
| 1547 | 13 January. Letters patent of Henry VIII, confirming an agreement of the previous December, grant the ‘custody order and government’ of the hospital to the City of London. |
| 1553 | Foundation of Bridewell Hospital by Edward VI. |
| 1557 | Some time after this date, <u>Bridewell and Bethlem are placed under a joint administration</u> which lasts until 1948. |
| 1598 | The first complete list of patients is recorded in the governors’ minutes. |
| 1634 | A visiting physician is appointed. The office of physician to Bethlem is continuous from this time on. |
| 1676 | <u>Bethlem moves to a new building at Moorfields</u> , the first custom-built hospital for the insane in this country. |
| 1683 | <u>Admission registers begin.</u> |
| 1723/33 | Two wings are added to the building, for incurable patients. |
| 1733 | Edward Barkham bequeaths an estate in Lincolnshire to support the incurable department. |
| 1770 | <u>Indiscriminate visiting by the public is ended by order of the governors.</u> |
| 1815 | The report of a Parliamentary Committee appointed to consider “the better regulation of madhouses in England” reveals abuses and ill treatment at Bethlem and elsewhere. |
| 1815 | August. The hospital moves to a new building at St George’s Fields, Southwark. |

- 1816 The first State Criminal Lunatic Asylum is opened at Bethlem, under the control of the Home Office.
- 1838 Building extensions which almost double the accommodation are begun.
- 1846 The new dome is completed.
- 1852 The first resident physician superintendent is appointed, and a major programme of reform is begun.
- 1853 The Lunacy Commissioners are empowered to make regular inspections of the hospital.
- 1857 Pauper patients are no longer admitted from this time.
- 1863/64 Criminal patients are transferred to Broadmoor, and the ‘criminal wings’ demolished.
- 1870 A convalescent establishment is opened at Witley in Surrey.
- 1882 Permission is granted by the Charity Commissioners for the first paying patients to be admitted.
- 1907 Dr. Henry Maudsley offers £ 30,000 to the London County Council for the establishment of a hospital for early and acute cases of mental illness.
- 1915 The Maudsley Hospital buildings are completed in Denmark Hill, and handed over for use as a military hospital.
- 1919 Bethlem opens an outpatients department, the “Hospital for Nervous Diseases”, at 52 Lambeth Road.
- 1923 The Maudsley Hospital is opened as an LCC mental hospital.
- 1924 Both Bethlem and the Maudsley are admitted as medical schools of the University of London.
- 1925 The Monks Orchard Estate is bought by the governors of Bethlem.
- 1930 The new hospital at Monks Orchard is opened by Queen Mary.
- 1941 Queen Mary becomes President of Bridewell and Bethlem.
- 1948 Introduction of the National Health Service. The Bethlem Royal Hospital and the Maudsley Hospital are merged to form a postgraduate psychiatric teaching hospital. The Maudsley’s medical school (now the medical school of the joint hospital) becomes the Institute of Psychiatry. Queen Mary becomes patron of the new joint hospital.
- 1967 The Institute of Psychiatry moves into a new building in De Crespigny Park, adjacent to the Maudsley.
- 1969 Princess Alexandra becomes patron of the joint hospital.
- 1982 The Bethlem Royal Hospital and The Maudsley Hospital Special Health Authority replaces the Board of Governors.
- 1994 The Bethlem and Maudsley NHS Trust is established.
- 1995 The Trust takes over responsibility for Croydon Mental Health Services, giving Bethlem a local commitment for the first time.

(Allderidge, *Bethlem Hospital 1247-1997: A Pictorial Record*, London x-xi)

Bibliography

Allderidge, Patricia. *Bethlem Hospital 1247-1997: A Pictorial Record*, London: Phillimore, 1997.

-----, “Management and Mismanagement at Bedlam, 1547-1633.” *Health, Medicine, and Mortality in the*

- Sixteenth Century*. Ed. Charles Webster. Cambridge : Cambridge University Press, 1979. 141-64.
- Altick, Richard. D. *The Shows of London*. Cambridge : Harvard University Press, 1978.
- Andrews, Jonathan, Asa Briggs, Roy Porter, Penny Tucker, and Keir Waddington. *The History of Bethlem*, London : Routledge Press, 1997.
- Awdwley, John. *The Fraternity of Vagabonds*, 1561. in Kinney.
- British Library, Ms Add. 24665 (Giles Earle's songbook), 1615-20. in Duffin.
- Brownlow, F.W., *Shakespeare, Harsnett, and the Devils of Denham*. Newark and London : University of Delaware Press, Associated University Presses, 1993.
- Byrd, Max. *Visits to Bedlam : Madness and Literature in the Eighteenth Century*. Columbia, S. C. 1974.
- Carroll, William C. "The Base Shall Top th" legitimate : The Bedlam beggar and the roll of Edgar in King Lear." *Shakespeare Quarterly* 38 (1987) : 426-41.
- . *Fat King, Lean Beggar : Representations of Poverty in the Age of Shakespeare*. Ithaca : Cornell University Press, 1996.
- Duffin, Ross W., *Shakespeare's Songbook*; with a foreword by Stephen Orgel, W.W. Norton & Company, New York/London, 2004.
- Graves, Robert. *The Crowning Privilege : A Selection of Lectures and Essays Concerned with Professional Standards in Poetry*. Aylesbury : Pelican, 1955.
- , *English and Scottish Ballads*. London : Heinemann, 1957.
- Greenblatt, Stephen. "Shakespeare and the Exorcists." *Shakespeare and the Question of Theory*. Ed. Patricia Parker and Geoffrey Hartman. New York : Methuen, 1985.
- . *Shakespearean Negotiations*. Berkeley : University of California Press, 1988.
- Harman, Thomas. *A Caveat or Warening for Commen Cursetors Vulgarely Called Vagabones*, 1566. in Kinney.
- Jackson, Ken. *Separate Theaters : Bethlem ("Bedlam") Hospital and the Shakespearean Stage*. Newark : Delaware University Press, 2005.
- Jonson, Ben. *The Complete Plays of Ben Jonson*. Ed. C. H. Herford and Percy Simpson. Oxford : Clarendon Press, 1952.
- Judges, A.V., ed. *The Elizabethan Underworld*. London : George Routledge & Sons, 1930.
- Kinney, Arthur F., ed. *Rogues, Vagabonds and Sturdy Beggars : A New Gallery of Tudor and Early Stuart Beggars*. Amherst : The University of Massachusetts Press, 1990.
- MacDonald, Michael. *Mystical Bedlam : Madness, Anxiety, and Healing in Seventeenth-Century England*. Cambridge : Cambridge University Press, 1981.
- Mullaney, Steven. *The Place of the Stage : License, Play, and Power in Renaissance England*. Chicago : University of Chicago Press, 1988.
- Murphy, John L. *Darkness and Devils : Exorcism and King Lear*. Athens : Ohio University Press, 1984.
- Neely, Carol Thomas. "Documents in Madness : Reading Madness and Gender in Shakespeare's Tragedies and Early Modern Culture." *Shakespeare Quarterly* 42.3 (1991) : 315-38.
- . "Recent Work in Renaissance : Psychology; Did Madness Have a Renaissance?" *Renaissance Quarterly* 44.4 (1991) : 776-91.

- , *Distracted Subjects: Madness and Gender in Shakespeare and Early Modern England*. Ithaca: Cornell University Press, 2004.
- O'Donoghue, Edward Geoffrey. *The Story of Bethlehem Hospital from Its Foundation in 1247*, E.P. Dutton & Company, New York, 1915.
- Pound, John. *Poverty and Vagrancy in Tudor England*. London: Longman, 1986.
- Pugliatti, Paola. *Beggary and Theatre in Early Modern England*. Aldershot: Ashgate Publishing Limited, 2003.
- Reed, Robert. *Bedlam on the Jacobean Stage*. Cambridge, MA.: Harvard University Press, 1952.
- Salkeld, Donald. *Madness and Drama in the Age of Shakespeare*. Manchester: Manchester University Press, 1993.
- Shakespeare, William. *The RSC Shakespeare: William Shakespeare Complete Works*. Ed. Jonathan Bate and Eric Rasmussen. Basingstoke: Macmillan, 2007.
- , *King Lear*. The Arden Shakespeare 3rd Series. Ed. R. A. Foakes. London: Thompson learning, 1997.
- Slack, Paul. *The English Poor Law 1531-1782*. London: Macmillan, 1990.
- , *Poverty and Policy in Tudor and Stuart England*. London: Addison-Wesley, 1988.
- , "Social Policy and the Constraints of Government, 1547-58." *The Mid-Tudor Policy, c.1540-1560*. Ed. Robert Tittler and Jenifer Loach, 1980.
- Sixth Report of the Royal Commissioners on Historical Manuscripts, Part I. Report and Appendix*. 1877. Web. 21 Sep. 2018. <https://archive.org/stream/reportofroyalcom06grea/reportofroyalcom06grea_djvu.txt>

注

- i リチャード2世による治世の間、1377年に起こったことに言及している。
- ii ジェイムズ1世の長男、ヘンリーのプリンス・オブ・ウェールズ戴冠（1610年6月4日）を指す。
- iii 「アブラム・マン」の呼称は、ベツレヘム慈善院のアブラハム病棟に由来する。
- iv ハーズネットのパンフレットが対象としたのは、1585年春から翌年の夏にかけて行われたカトリックのエクソシズムであるが、それは1585年の法令によってイエズス会士またはカトリックの渡英宣教師がイングランドの地に滞在するだけで大逆罪とされたからである。
- v 宗教改革によってエクソシズムは行われなくなるが、教会法が改正されなかったため、儀式そのものは教会法上存続した。1604年の教会法第72条の改正により、英国国教会はエクソシズムを事実上禁止することになる。